

『六月二十七日望湖樓醉書』

蘇東坡

比喩とユーモアの名手



笠履図(海南省儋州東坡書院蔵の拓本)

黒雲翻墨未遮山 黒雲墨を翻して未だ山を遮らず
白雨跳珠亂入船 白雨珠を跳らして亂れて船に入る
捲地風來忽吹散 地を捲くの風は來りて忽ち吹き散ず
望湖樓下水如天 望湖樓下水天の如し

黒い雲が墨汁をぶちまけたように広がっているが、まだ山をすっかり隠してはいない。すると白い真珠を撒き散らすような俄雨が船に降り込んできた。

と見る間に大地を巻きあげるように風が吹いて来て、雲や雨を吹き散らす。そのあと望湖樓下の水面は青一面に澄みわたって、まるで天と湖水と見分けもつかなくなってしまう。

動から静・色彩の変化

蘇東坡のよく知られている絶句で、五連作の第一首。一〇七二年、三十七歳のとき杭州の鳳凰山にあった望湖樓での作。起句から転句まで、まっ黒な雲の急速なひろがり、俄雨のはげしい襲来、そして大地を巻きあげるような突風と、激しく変化する気象を簡明な比喩を用いながら力強く描いている。結句では、それまでの動の世界を一転させて水面と大空の静まりかえった風景の描写となる。起句と承句が対句になっていて、「黒」と「白」との色彩が、俄雨のうす暗い状況を印象的にするとともに、「水天の如し」という表現が、晴れわたった大空と湖水の青々とした色彩を表出するのをきわだたせている。画家としても名のあつた蘇東坡らしい詩である。

蘇東坡の詩語の見事さ

蘇東坡といえば比喩の名手ということが先ず頭に浮かぶ。吉川幸次郎博士の「宋詩概説」(岩波書店、中国詩人選集)に「高きに登りて首を回らせば坂と隴の隔たり、但見る烏き帽の出では復没るるを」という、弟の蘇轍を見送る詩の一部やその他の例を挙げて、警拔な觀察・発想・比喩が蘇東坡の特性であるとの解説がある。「望湖樓醉書其の一」の中にも黒雲と墨といたり白雨を珠といたり

等の比喩表現が詰まっている。今日幾つもある詩語集には、詩に見られる字句がほとんど全部収録されていることもあり、また詩そのものが、あまりに人口に膾炙かいしやしているために、観察の警拔さ、発想のユニークさ、比喩の巧みさというところが幾分磨滅して見える。が実際に蘇東坡がこの詩を作った当時は「水如✓天」を除いて、新鮮な表現として人々を驚かせたのであった。「水如✓天」は蘇東坡以前にも何人かの詩人が使っている。

王安石と蘇東坡 たがいに抱いた尊敬

政治上の生涯の敵であった王安石さえも、蘇東坡の修辭の才、特にその比喩の巧みさは兜を脱いだほどの名手だった。蘇東坡が生きた時代は北宋の存亡にかかわる政治方針その他をめぐり、王安石率いる新法派と蘇東坡およびその師匠、歐陽脩おうようしゅうを主力とする旧法派とが鋭い対立状況にあって新法派が優位に立ち、蘇東坡は長らく官界を放逐ほうちやくされていた。蘇東坡は後年、自分を長らく流罪に処した王安石を訪れて詩談を交わしている。

吉川幸次郎博士は次のように記している。「四十九歳、流罪を許されると、金陵に退隱する王安石を訪問している。二人がおたがいに抱いた尊敬は、それぞれの詩に見える。蘇東坡のそのときの句『峰は多くして巧みに日を障り江は遠くして天を浮かべんと欲す』を王安石は激賞し、その韻

に和している。また『知らず更に幾百年にして方めて此の如き人物有るべきや』と蘇東坡の人柄に感服したともいう。「せせこましい小人の心をもつて、二君子をおしはかつてはならない。」蘇東坡の詩の表面にみなぎる才気ばかりに目を奪われてはならない。かれの詩に、地下水のように底流しひろがるのは、大きなあたたかい人格である。」と。「大きなあたたかい人格」の現われの一つにユーモアがある。蘇東坡の特性のひとつは、まさにそのユーモアにある。ユーモアとは単なる滑稽こっけいではない。

つぎにそのことがよくわかる「六月二十七日望湖樓醉書」其の五を掲げる。

未成小隱聊申隱 未だ小隱を成さず聊か中隱
可得長間勝暫間 長間の暫間に勝るを得可けんや
我本無家更安往 我は本家無し更に安くにか往かん
故郷無此好湖山 故郷此の好湖山無し

山林に隠れることも出来ず、今のところは中途半端な役人生活に甘んじている。そうはいえ、山林中での長い自由時間は仕官の身の暮らしの中で得られる短い自由時間に、果たして勝るものだろうか。もともと家のない私だから、この上どこへ行けばいいのだろうか。故郷へ帰ったとて、このようなすばらしい山も湖もないではないか。

